



TITLE:

漢三國鏡銘集釋補遺

AUTHOR(S):

「中國古鏡の研究」班

---

CITATION:

「中國古鏡の研究」班. 漢三國鏡銘集釋補遺. 東方學報 2013, 88: 245-271

ISSUE DATE:

2013-12-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/180569>

RIGHT:

## 漢三國鏡銘集釋補遺

本稿は京都大學人文科學研究所の共同研究「中國古鏡の研究」班〔二〇〇九―二〇一二〕が報告した「前漢鏡銘集釋」・「後漢鏡銘集釋」・「三國西晉鏡銘集釋」・「漢三國西晉紀年鏡銘集釋」の補遺である。その多くは二〇一一・二〇一二年度の日本學術振興會・科學研究費補助金（挑戰的萌芽研究）「後漢鏡藝術論」により研究代表者の岡村秀典と研究分擔者の森下章司・向井佑介が日中兩國で調査した新資料である。

三桁の數字であらわした銘文の編號は、従前の「集釋」にしたがい、百の位が漢鏡の時期を表示し、時代順に配列した。既出の銘文に類似して關連づけられるばあいは、集釋編號の後ろにAを加え、補遺の銘文番號をB以下とした。紀年鏡銘については年月日をそのまま記している。

參考文獻の表記法は「集釋」に準據する。頻出する出典は略稱を用い、卷號と圖版番號を併記した。それ以外の參考文獻は「」に著者名と發表年を記した。

句讀は、押韻または叶韻しているばあいは句點の「。」、そうでな

## 「中國古鏡の研究」班

いばあいは讀點の「・」とした。韻部はおもに王力説にもとづく郭錫良〔一九八六〕による。

本稿は岡村・向井・森下が作成し、紀年鏡銘については光武英樹が分擔した。ほかに共同研究に参加されたのは、石谷愼、太田麻衣子、金文京、田中一輝、原田三壽、廣川守、馬淵一輝の各位である。

### ●二三六 B

見日之光。 日の光 現はる。

若月之明。 月の明かりの若し。

所言必當。 言ふ所は必ず當らん。

(注)

江蘇省盱眙縣大雲山二號墓から出土した草葉紋鏡〔南京博物院ほか二〇一三〕にみる。集釋二三六Aに「見日之光。天下太陽。所言必當。」とあり、第二句の「天下太陽」を「若月之明」に改めている。同じように陽部で毎句押韻する。

この第二句は、第一句の「日の光」を承けたものではなく、本鏡

の明かりが月のようだというのである。この鏡が出土した大雲山二號墓の被葬者が江都王后であることは、その陰的性質と關係するのかもしれない。

### ●四三九B

漢有善同出丹陽。

凍已銀黃清且明。

左龍右虎辟五兵。

朱爵龜蛇順陰陽。

神人玉手把持央。

庶人所造奏侯王。

月民服之、

延年壽長。

漢に善き銅有り、丹陽に出づ。

鍊るに銀と黃を以てし、清にして且つ明なり。

左龍と右虎は五兵を辟く。

朱雀と龜蛇は陰陽を順ふ。

神人の玉手は英を把持す。

庶人の造れる所にして侯王に奏めん。

月ごとに民之れを服さは、

年を延ばし壽長からん。

(注)

徐州の李平氏が所藏する方格規矩四神鏡にみる。王綱懷(二〇一〇・E一三五)が江蘇平鏡齋藏として紹介し、二〇一二年に岡村・森下・向井が李氏宅で調査した。直徑一六・三センチ、重さ六二八グラム。銘文は鈕座の十二支銘からみて「卯」の位置から時計回りに展開し、「陽」・「明」・「兵」・「陽」・「央」・「王」・「長」が陽部で第七句をのぞき毎句押韻する。釋文はおおむね王綱懷にしたがう。

第一句の「同」は「銅」の省字または假借で、本句は集釋四三八、四四一にほぼ同じ。

第二句の上四字は集釋四三九Aに「和以銀錫」、集釋四四〇に「難以銀錫」という類句がある。「凍」は「鍊」の假借。「已」は「以」と同文。「黃」は原料の銅のことで、「銀黃」は「銀錫」を改めた語句。同時期には集釋四二九の「凍治錫銅去其宰」や集釋四三

一の「凍銅錫去其宰」という例があるが、原料の金屬を色であらわすのは漢鏡七期に多く、集釋七二五に「合凍三黃明竟起」、永康元年(一六七)正月午日鏡に「幽凍黃白、早作明竟」、永康元年六月八日鏡に「合凍黃白周刻兮」、熹平三年(二七四)正月丙午鏡に「合凍白黃」という例がある。本句は集釋四〇一の「凍治銅華清而明」を改變したもの。

第三句の類句に集釋四二四の「左龍右虎辟不羊」や集釋四三九Aの「左龍右虎主三彭」があり、その下三字を「辟五兵」に改めたもの。「五兵」は五種類の武器を指す。『周禮』夏官・司兵の「掌五兵・五盾」の鄭玄注に「鄭司農云、五兵者、戈・殳・戟・酋矛・夷矛。」とあるが、後ろの經文に「軍事建車之五兵、會同亦如之」とあり、鄭玄注に「車之五兵、鄭司農所云者是也。歩卒之五兵則無夷矛而有弓矢。」とあって、車兵と歩兵とで種類が異なっているという。また、『漢書』吾丘壽王傳に「臣聞古者作五兵、非以相害、以禁暴討邪也。」とあり、その顏師古注に「五兵謂矛・戟・弓・劍・戈。」という。「辟五兵」の用例は『神仙傳』卷四「九靈子」の「此術可以辟五兵、却虎狼、安全己身、營護家門、保子宜孫、内外和睦」や『抱朴子』内篇卷十五「雜應」の「或問辟五兵之道。抱朴子曰、吾聞、吳文皇帝曾從介先生受要道、云、但知書北斗字及日月字、便不畏白刃。」など六朝代の道家文獻に多い。鏡銘ではほかに類例をみないが、「辟兵」なら河北省石家莊市蕭家營二號墓から出土した五鳳元年(前五七)銅帶鈎に「五鳳元年五月丙午、□辟邪兵除央、□此鈎者皆侯王」という銘文があり(河北省文物研究所ほか二〇〇七)、「辟百兵」は奈良縣石上神宮に傳わる東晉の泰和四年(三六九)七支刀に「造百練□七支刀、以辟百兵」という象嵌銘がある。

第三句の類句に集釋四三九Aの「朱爵玄武順陰陽」がある。その

「玄武」を「龜蛇」に改めたもの。「玄武」は『後漢書』王梁傳の「赤伏符」曰、王梁主衛作玄武。」の李賢注に「玄武、北方之神、龜蛇合體。」とあり、「龜」と「蛇」が合體した四神のひとつ。鏡銘では「玄武」のみ用いられ、「龜蛇」はほかに例がない。『漢書』哀帝紀に「元壽元年……孝元廟殿門銅龜蛇鋪首鳴。」とあり、本鏡と同時期に銅製「龜蛇」が門の鋪首に用いられていたことがわかる。なお、本鏡では鈕座の十二支銘でみた「巳（南南東）」の位置に「龜蛇」の玄武があらわされている。

第四句を王綱懷は「神人王□□持□」とし、三字未讀だが、現物を觀察して「神人玉手把持央」と釋す。「神人」は「仙人」。集釋四二二・四二三に「上大山見神人」などの例がある。「玉手」は、玉のように美しい手。曹植「妾薄命」に「携玉手、喜同車」（『曹子建集』卷六）、何子朗「和虞記室騫古意」（『玉臺新詠』卷五）に「清鏡對蛾眉、新花映玉手」とある。「巴」は「把」の省字または假借。「把持」は、手で取り持つこと。「央」は「英」の省字または假借で、「華」の意。『詩經』鄭風・有女同行に「有女同行、顔如舜英」とあり、毛傳に「英、猶華也。」という。本鏡では鈕座の十二支銘でみた「卯（東）」の位置に芝草を手にした「神人」の圖像がある。

第五句の第三字を王綱懷は未讀だが、「所」字である。「所造」は集釋五二八に「杜氏所造」、集釋六〇一に「名工所造成文章」という用例がある。「奏」は、「すすめる」意。『漢書』丙吉傳に「數奏甘毳食物」の顔師古注に「奏、進也。」とある。「庶人」は『國語』周語上に「庶人工商、各守其業、以共其上」とあり、民間人を指すことが多いが、ここでは民の官にある者か。『禮記』王制に「庶人在官者、其祿以是爲差也。」とあり、鄭玄注に「庶人在官、謂府史之屬。官長所除、不命於天子國君者。」という。

#### ●四四七B

新興辟雍建明堂。  
然于舉士列侯王。  
將軍令尹民戶行。  
諸生萬舍在北方。  
郊祀星宿竝共皇。  
子孫復具治中央。

新辟雍を興し、明堂を建つ。  
單于是土を擧げて侯王に列せらる。  
將軍と令尹は民の行なふ所なり。  
諸生の萬舍は北方に在り。  
郊祀と星宿は竝びに皇に恭へん。  
子孫備具して、中央を治めん。

（注）  
徐州の劉軍氏が所藏する方格規矩四神鏡にみる。王綱懷（二〇一〇・C1三圖一三）が江蘇聚珍閣藏として紹介し、二〇一二年に岡村・森下・向井が劉氏宅で調査した。直徑一八・八センチ、重さ八一二グラム。内區の中間に銘帶があり、主紋帶を内外二圈に分割する。銘文は四神の方位からみて西南の位置に「…」記號があり、時計回りに展開する。整った七字句で「堂・王・行・方・皇・央」が陽部で毎句押韻する。第一句から第四句までは集釋四四七Aに同じで、本銘はその原形であつた可能性がある。

第五句以下の釋文は王綱懷にしたがう。「郊祀」は、皇帝が夏至に北郊で地を祀り、冬至に南郊で天を祀るまつり。本銘は元始五年（紀元後五）に王莽がその「郊祀」を整備し、新たに日・月・星辰と二十八宿の「星宿」を東西南北・中央に配當して祭域を設けた（『漢書』郊祀志下）ことをいう。「共」は「恭」または「供」の假借。「皇」は「皇天」のこと。『漢書』禮樂志の「郊祀歌」に「繼統共勤、順皇之德」とあり、その顔師古注に「共、讀曰恭。皇、皇天也。此言天子繼承祖統、恭勤爲心而順天也。」という。

第六句の「復」は「備」の假借（羅振玉一九二九）。『儀禮』特牲饋食禮の「尸備荅拜焉」の鄭玄注に「古文備爲復」とある。あるい

は「復」は「腹」に通じ、「厚」・「盛」の意にもなる。『呂氏春秋』季冬紀の「冰方盛、水澤復」の高誘注に「復、亦盛也。」とあり、『禮記』月令はその「復」を「腹」とし、鄭玄注は「腹、厚也。」とする。「治中央」は集釋四一七に「十子九孫治中央」、集釋四一八に「八子九孫治中央」とあり、この句は集釋四四六の「子孫備具居中央」と同義。

## ●四五五

心相思、  
長母絶。  
昭明鏡、  
好如月。  
進朱顔、  
得所欲。  
象日月。  
金爲局。

心に相ひ思ひ、  
長く絶ゆること母かれ。  
昭明なる鏡は、  
好きこと月の如し。  
朱顔に進めば、  
欲する所を得ん。  
日月に象り、  
金もて局を爲れり。

## (注)

徐州の李平氏が所藏する方格規矩四神鏡にみる。王綱懷(二〇一〇・E一二六圖六)が江蘇平鏡齋藏として紹介し、二〇一二年に岡村・森下・向井が李氏宅で調査した。直徑一四・六センチ、重さ五一グラム。外區の流雲紋はほかに例のない形である。銘文は四神の方位からみて眞南の位置に「…」記號があり、時計回りに展開する。釋文はおおむね王綱懷にしたがう。「絶」・「月」・「月」が月部で押韻し、屋部の「欲」・「局」が入聲で合韻する。

第一・第二句は集釋二〇四・二〇五の「願永思而母絶」や集釋二四七の「心與心、長母相忘」など漢鏡二期・三期に類似句が多いが、

同時期では集釋四〇八の「長思君」や永始二年(前一五)方格規矩四神鏡の「長相思兮、世不絶」という例しかない。

第三・第四句の類似句に永始二年鏡の「作精明鏡兮、好如日月」がある。集釋二〇四の「内請質以昭明、光輝象夫日月」や永始二年鏡のように鏡の明るさを日月にたとえるのがふつうだが、本鏡はつづく第五句に「進朱顔」とあるように女性向けの鏡であり、また三句句にするために「日」を脱したのであろう。

第五句の「進」は「すすめる」・「ささげる」意。集釋四〇六に「升高宜兮進近親」という用例がある。「朱顔」は、女性の赤い顔。永始二年鏡に「見珠顔、心中驩」、集釋四〇三の注に引く獸帶鏡銘に「治鏡爲右見朱顔」という例があり、その注を参照。

第六句を王綱懷は三字とも未讀だが、「得所欲」であろう。集釋二〇一・二二五に「得所喜」、集釋二〇二に「得所好」とあり、ここでは押韻のため集釋五二九と同じ「得所欲」にしている。

第八句の「局」は「博局」のこと。『說文』二上に「局、……一曰、博所以行碁。象形。」とある。方格規矩四神鏡にあらわされた方格とTLV形の規矩紋は、集釋四三五に「刻婁博局去不羊」、集釋四四〇に「刻治六博中兼方」とあるように「博局(六博)」紋様とみなされていた。

## ●六一六

龍氏作竟街少有。  
尙有東王父西王母。  
仙人子高赤松子。  
三足烏成辟邪耶。  
騏驎騄耳天所使。

龍氏鏡を作るに街に有ること少なし。  
上に東王父・西王母、  
仙人の(王)子喬と赤松子有り。  
三足烏は辟邪と成る。  
騏驎・騄耳は天の使ひとする所なり。

服此竟宜孫子。

此の鏡を服さば、孫と子に宜し。

(注)

鄭州の王趁意氏が所藏する畫像鏡の銘文(中原一一五)。二〇一二年に岡村・森下・向井が調査した。内區を乳で四區畫し、西王母・東王父と侍者、騎馬人物、奏樂者などの圖像を配する。西王母は小兒を抱きかかえた希有な姿で、それによって圖録は本鏡を「西王母孕育嬰兒畫像鏡」と命名した。圖像表現は村上開明堂舊藏の「龍氏」畫像鏡(開明堂四七)と近い。銘文は斷面かまぼこ形の銘帶にどこされ、七字句を基本とするが、句によって一字の増減がある。之部の「有」・「母」・「子」・「使」・「子」と魚部の「耶」とが叶韻する。之部と魚部の叶韻は集釋五二四・六〇五に例がある。釋文はおおむね圖録にしたがうが、部分的に釋讀を改める。

第一句の「街少有」はめずらしく、集釋五二一・六〇三などの「世少有」がふつう。「街」字を用いたのは後述の「龍氏」盤龍鏡(中原七七)に「甚獨街」があるだけである。

第二句の「尙」は「上」の假借。

第四句の下三字を圖録は「伐辟耶」と釋すが、「成辟耶(邪)」であらう。「三足鳥」は太陽の中に住むとされる傳説の鳥で、『論衡』説日に「日中有三足鳥、月中有兔・蟾蜍」とある。また、『史記』司馬相如傳の「幸有三足鳥爲之使」の『史記正義』に「三足鳥、青鳥也。主爲西王母取食、在昆墟之北。」とあり、西王母の眷族でもあった。鏡銘では集釋五三四に「辟耶宜□、上有奇守、出中三鳥」とあり、奇獸のひとつとされている。しかし、本鏡のように「三足鳥」が「辟邪」のはたらきをするのはめずらしい。

第五句の「驥」は、『集韻』に馬の名とあるが、「驥」の誤記であらう。「騏驎・騏驎」は王の所有する名馬であり、『戰國策』齊四に

は「世無騏驎・騏驎、王駟已備矣。」「淮南子」主術訓には「騏驎・騏驎、天下之疾馬也。」とある。本鏡の内區にあらわされた二頭の馬がそれにあたり、それに騎乗する仙人は第三句の王子喬と赤松子であらう。浙江省紹興市漓渚出土の獸帶鏡(浙江修訂・圖版二〇)の内區榜題に「赤誦馬」・「王喬馬」とあるのが、これに關連する。鏡銘にあらわされた天下の名馬としては、集釋七二八の「霜護順和氣精」があり、駿馬の「霜」のはたらきで、天の運行が順調で精氣があふれることをいう。

王趁意の編集した中原七七には、同じ「龍氏」の制作した盤龍鏡が收録されている。その銘文と四頭の龍からなる内區の主紋は特異だが、實見していないので、銘文だけを備考として記しておく。

龍氏作竟甚蜀街。

上有白帟辟耶匹宛池。

文章羊見俠中天馳。

吉日造之人眞知。

令家萬世多積譬。

大利兮。

龍氏鏡を作るに甚に街に獨つのみ。

上に白虎・辟邪有り、宛池に匹ふ。

文章は詳らかに現はれ、中天を挟みて馳せる。

吉日に之れを造るに、人眞に知るなり。家をして萬世なら令め、多く譬を積まん。大いに利し。

銘文は「…」記號から時計回りに展開し、支部の「街」・「知」・「譬」と歌部の「池」・「馳」が叶韻する。第一句の「甚蜀街」以下、語句のほとんどはほかに例がない。

## ●六一七A

袁氏作竟兮世少有。

袁氏鏡を作るに、世に有ること少なし。



倉龍在左白虎居右。

蒼龍は左に在り、白虎は右に居る。

白牙鼓瑟子其唵。

伯牙 瑟を鼓し、(鍾) 子期 吟ふ。

長樂無極如後宮、

長く樂しむこと極まり無く、後宮の如し。

長保二親。

長く二親を保たん。

(注)

浦上蒼穹堂藏の畫像鏡にみる。二〇一二年に岡村・森下・向井が調査した。徑一二・七センチ、重さ四八三グラム。内區は圓座乳で四區に分け、二體の坐像と顧首形の龍虎を配置し、外區には唐草紋をいれる。その圖像は銘文によって長い瑟を奏する伯牙とそれにあわせて歌う鍾子期、蒼龍と白虎に同定できる。銘文は起句の前に「・」記號があり、之部の「有」「右」が押韻し、第三句で換韻して侵部の「唵」と眞部の「親」が叶韻する。丹陽銅鏡青瓷博物館藏の「袁氏」畫像鏡(千鏡堂一六三)は、これと類似的圖像紋様と銘文をもち、岡村(二〇一一)に銘文の釋讀がある。

作鏡者の「袁氏」は漢鏡六期から七期にかけて活動した徐州系の代表的な鏡工で、「石氏」や「呂氏」らと近い關係にあつた(森下章司二〇一一)。第一・第二句は漢鏡五期末における「尙方」盤龍鏡の集釋五二二や「石氏」盤龍鏡の集釋五二一を繼承している。内區の圖像を説明した第二句の四言二句に合わせ、第一句に助辭の「兮」を挿入し、リズムを整えている。起句の「鏡」字の後ろに「兮」を加えて八字句にした例に、漢鏡五期末の「八維此鏡兮與衆異」(集釋五四五)がある。

第三句は鈕を挟んで對置された二體の坐像を説明したもの。末字の「唵」は「吟」の假借。『漢書』息夫躬傳に「秋風爲我唵、浮雲爲我陰」とあり、顏師古注に「唵、古吟字」とある。旁の「金」が「今」の假借であることは、集釋四三〇の注に記した。「白牙」

は伯牙、「子其」は鍾子期。伯牙と鍾子期は集釋五四一に「白牙鼓鳴琴兮、子其傷其子」として既出で、その注を參照。鍾子期は伯牙の演奏のよき理解者として古典籍に傳承されるが、鏡銘に鍾子期が記されるのはめずらしく、伯牙の琴にあわせて鍾子期が吟じたという記録はない。また、「白牙鼓瑟」について、建安十年までの重列式神獸鏡に「白牙單琴、黃帝除兇」とあり、古典籍での伯牙は琴の名手とされるが、小校一五・六九「漢吾作明鏡一」の四獸鏡に「白牙鼓瑟」、孔震氏藏の天冊元年(二七五)□月十四日「董氏」三段式神獸鏡に「白牙彈瑟」とあるように、弦の多い「瑟」を弾くという傳承もあつたらしい。なお、『漢書』司馬遷傳に「蓋鍾子期死、伯牙終身不復鼓琴」とあり、顏師古注に「伯牙・鍾子期、皆楚人也。」という。本鏡の作者「袁氏」は、地元に傳わる説話を題材としたのだろうか。

第四句の「長樂無極」は『急就篇』卷四に「長樂無極老復丁」という用例があるが、鏡銘では「長樂未央」か「樂無極」となることが多い。「後宮」は王侯の后妃が住まう宮殿。鏡銘では初出。

#### ●六一七 B

袁氏作竟世少有、  
白牙鼓瑟子其唵。

袁氏 鏡を作るに、世に有ること少なし。  
伯牙 瑟を鼓し、(鍾) 子期 吟ふ。

長樂無極如後宮、  
千秋萬世終身無患。

長く樂しむこと極まり無く、後宮の如し。  
千秋萬世、終身患ふこと無し。

子孫に利し。

(注)

杭州の孔震氏が所藏する畫像鏡にみる。二〇一一年に岡村・森下・向井が調査した。内區の圖像は前鏡と類似するが、「蒼龍・白

虎」のかわりに熊と蟾蜍のような奇獸を配し、それに對應して銘文も改めている。圖像と銘文とを整合させるのが「袁氏」の方針であつたらしい。外區は鋸齒紋と複線波紋と鋸齒紋からなる。銘文は起句の前に「…」記號があり、侵部の「唵」と元部の「患」と文部の「孫」が叶韻した可能性がある。

第一句から第三句までは前鏡に既出。ただし、七字句でそろえたため、第一句の「兮」を省略した。

第四句の「千秋萬世」は集釋三〇一・四四〇・五二四などにもあり、「千秋萬歲」と同義。「終身無患」は初出。

# ●七〇六B

周是作竟真大工。

上有賢士辟不羊。

巧工刻之誠文章。

和以鉛錫清且明。

買此竟后富傷。

(注)

周氏鏡を作るに、真に大いに巧みなり。

上に賢士有り、不祥を辟く。

巧みなる工は之れを刻み、文章を成せり。

和するに鉛と錫を以てし、清にして且つ明なり。

此の鏡を買はば、後に富昌ならん。

浦上蒼穹堂藏の畫像鏡にみる〔岡村二〇一二〕。二〇一二年に岡村・森下・向井が調査した(圖1)。徑一九・八センチ、重さ七八九グラム。内區圖像は東王公・西王母と青龍・白虎の二神二獸である。銘文は西王母と白虎とのあいだから反時計回りに展開し、末句をのぞいて整った七字句で、「尙方」内向連弧鏡(嚴窟二上八三三)の銘文(集釋七〇六A)に類似する。東部の「工」と陽部の「羊」・「章」・「明」・「傷」が叶韻する。

第一句の「是」は「氏」の假借で、「周氏」は本鏡の制作者であ

る。「周氏」は吳派に屬し、しばしば「周是」と記す。「工」は「巧」の假借(笠野毅一九八三)。「廣雅」釋詁三に「工、巧也。」とある。ただし、王力の古音説では「巧」は幽部である(郭錫良一九八六)。

第二句の「賢士」は集釋七〇六Aの「仙人」を置換したもの。圖像の東王公・西王母を指すのか。東王公・西王母の尊稱として斜縁同向式神獸鏡の集釋七二八には「賢聖神仙坐東西」、三段式神仙鏡の集釋・華西〇二には「調刻神聖。西母東王」、三角縁神獸鏡の集釋・三角縁〇八には「古有聖人東王父・西王母」、同・三角縁一一には「上有神人王父母」とあつた。

第三句は集釋七〇六Aに「巧師刻成文章」とあつた。「巧工」と「巧師」は同義である。「誠」は「成」の繁字。



圖1 集釋706B 浦上蒼穹堂藏「周是」畫像鏡



第四句は集釋七〇六Aに「和周（調）鉛錫清且明」とあった。「鉛」と「鈐」とは同じ。その「鉛」字は不鮮明で、笠野毅（一九八三）は鏡銘に「鉛」字が記された確かな例がないことから、字釋に疑問を呈していたが、本銘の「鈐」字は明瞭である。

第五句は集釋七〇六Aに「買氏竟者□富昌」とあった。その「氏」は「是」の假借で、本銘の「此」と同じ。本銘の「后」は「後」の、「傷」はその「昌」の假借。

●七二八B

吾作明鏡、  
取法上皇。

幽凍三金、

神禽萬疆。

辟邪距虛、

致福除凶。

曾年益壽、

富貴蕃昌。

樂未央。

功成事見、

師命久長。

子孫學者、

士至公卿兮。

（注）

越國文化博物館藏の斜縁同向式神獸鏡にみる。二〇一一年に岡村・森下・向井が展示品を観察した（圖2）。内區は維剛（巨）で區切られ、中段の左右に東王父と西王母、上段と下段に獸像を配す



圖2 集釋728B 越國文化博物館藏  
斜縁同向式神獸鏡

る。内區外周の銘文は時計盤で三時の位置に九曜紋狀の記號があり、時計回りに展開する。四字句を基本とし、陽部の「皇」・「疆」・「昌」・「央」・「長」・「卿」と東部の「凶」が叶韻するが、第九句は三字だけで、對になる句が脱落している。

第二句の「上皇」は天帝もしくは東皇太一。『莊子』天運に「天下戴之、此謂上皇。」とあり、『楚辭』九歌・東皇太一の「吉日兮辰良、穆將愉兮上皇」の王逸注に「上皇、謂東皇太一也。」とある。類似的斜縁同向式神獸鏡にも「吾作明鏡取法星」（集釋七二八A）という類句があったが、その「法星」は榮惑、すなわち火星である。第三句の「幽凍三金」は「幽凍三商」や「幽凍三剛」となるのがふつうで、鏡の原料となる「三種の金屬」を直接的にいったもの。

第四句の「神禽」は一般に瑞鳥・靈鳥の類を指し、班固「典引」（『後漢書』班固列傳下所引）に「嘉穀靈草、奇獸神禽」とある。本

鏡では内區の東王公・西王母にさしかけられた天蓋に止まる鳥を指すのだろう。

第五句の「辟邪・距虛」は、内區の上下段にあらわされた獸を指す。「辟邪・距虛」は集釋五四二の「龍氏」浮彫式獸帶鏡に「距虛辟邪除羣凶」とあるように、淮派の鏡群ではしばしば對になつて登場し、除凶の役割を果たす。

第六句の「致」は「いたす」。『史記』秦始皇本紀に「皇帝之德、存定四極。誅亂除害、興利致福」とある。

第一〇句の「功成事見」は集釋七四一の斜縁神獸鏡にみえる。

第一二・第一三句は「學者高遷、士至公卿」となることが多く、「子孫學者」はめずらしい。

# ●七三四B

劉氏作鏡、

幽凍三商。

雕刻無社、

配像萬疆。

白牙鼓琴、

鍾子聽其、

期子唵、

天禽四首、

銜持維剛。

邊太乙、

乘雲駕龍。

選從羣神、

五帝三皇。

劉氏 鏡を作るに、

三商を幽凍せり。

雕刻 止まること無く、

像を萬疆に配せり。

伯牙 琴を鼓し、

鍾子期 聽く。

箕子 吟ふ。

天禽・四獸あり、

維剛を銜持す。

邊に太乙あり、

雲に乗り龍に駕す。

群神を選び従ふ、

五帝三皇あり。

誅討鬼凶。

吉利。

鬼凶を誅討す。

吉にして利し。

(注)

徐州の李迪玲氏が所藏する同向式神獸鏡にみる。二〇一二年に岡村・森下・向井が調査した。直徑一八・一センチ、重さ六九五グラム。半圓方形帶の方格一四個をそれぞれ「田」字形に區畫し、内區右下の方格から銘文を時計回りに配している。右上↓右下↓左上↓左下の順に讀むのを基本とするが、第七句と第一〇句に一字ずつ脱字があり、句切りがずれたため結句を二字に節略している。陽部の「商」・「疆」・「剛」・「皇」と東部の「龍」・「凶」が叶韻するが、第六・第七句に錯簡があり、偶數句で押韻する原則が亂れている。

第四句までと第八〜一四句は集釋七三四Aに類似し、その「白牙舉樂、衆神見(容)」を本銘は「白牙鼓琴、鍾子其聽、期子唵」と改めている。また集釋七三四Aが末尾の二句を「常服者富貴、師命長」で結ぶのに對し、本銘は「吉利」を末句としている。

第五句の「白牙」は伯牙。前の集釋六一七Aに「白牙鼓瑟」とあり、その注を参照。

第六句の「鍾子聽其」は、本來「鍾子期聽」につくるべきところを、その第三字と第四字が倒錯し、さらにこの「期」と第七句の「其」とが置換したもの。耕部の「聽」であれば、陽部・東部と叶韻する。この第五・第六句は伯牙のよき理解者であつた鍾子期が伯牙の弾く琴の音を聴くさまを表現している。内區圖像の上方にあつて膝上に琴をのせて弾く進賢冠の老人が伯牙であり、その右にあつて袖で涙を拭いている人が鍾子期であろう。

第七句の「期子唵」の「期」は第六句の「其」と誤って置換したもので、「箕」の假借。「唵」は「吟」の假借。前掲補遺六一七A・

Bには「白牙鼓瑟子其唸」とあり、本銘はその七字句を繼承しつつ、「白牙鼓琴」につづけて「鍾子聽其」を挿入したのである。したがって、「期子唸」が三字句になっているのは、脱字というより、本来の「子其唸」の名残である。箕子は殷の紂王の親戚で、宋に封じられた微子開（啓）の重臣。『史記』宋微子世家に「紂爲淫佚、箕子諫、不聽。……乃被髮詳狂而爲奴。遂隱而鼓琴以自悲、故傳之曰箕子操」という。紂王を諫めて隱遁した箕子のつくった琴曲が「箕子操」で、『樂府詩集』琴曲歌辭一「箕子操」に「一曰、箕子吟」とあるように、それは「箕子吟」とも稱された。第五句から本句までの類句に集釋五四一の「白牙鼓鳴琴兮、子其傷其子」があり、集釋ではそれを「伯牙は鳴琴を鼓し、（鍾）子期は其の子を傷む」と譯したが、本銘によって「伯牙は鳴琴を鼓し、（鍾）子期は箕子を傷む」と訂正する。このような伯牙と鍾子期と箕子との關係を認めるならば、本銘は伯牙の彈く「箕子吟（操）」を聞いて鍾子期が悲しんだという解釋が成り立つが、いまみたように「期子唸」は前の集釋六一七A・Bの「子其唸」を繼承した語であるから、その「吟」は「うたう」という意味に解釋するのが妥當である。すなわち、伯牙と鍾子期の説話をあらわした集釋六一七A・Bが先行し、本銘ではそこに箕子の傳承を挿入したため、伯牙の奏でる音楽の聞き手と歌い手とのあいだで混亂が生じたのであろう。本銘は伯牙と鍾子期と箕子の説話をあらわした数少ない例のひとつであるが、それは伯牙と鍾子期が楚人とされ、箕子の傳承が『史記』宋微子世家に詳しく記されている土地柄と關係があろう。

## ●七四二B

九子明鏡、  
九子明鏡を作るに、

幽凍金剛。	金剛を幽鍊せり。
四氣象元、	四氣は元に象り、
六合設張。	六合に設け張る。
造作刑暮、	型模を造作し、
周刻萬彊。	萬彊に彫刻せり。
白牙陳樂、	伯牙樂を陳べ、
衆神見容。	衆神容を現はす。
統德序道、	德を統べ道を序し、
奉侍三皇。	三皇に奉侍す。
通丞五行、	五行に通承し、
福祿是從。	福祿是れ從 <sup>あつ</sup> まらん。
服者公卿、	服者公卿ならん。
其師命長。	其の師の命は長からん。

## (注)

劉東氏の所藏する畫文帶同向式神獸鏡の方格銘（今照一二一）。階段式の維剛表現、鈕と内區最外周の四方に環狀乳をいれること、通例の畫文帶同向式神獸鏡では黃帝が位置するところに蚩尤と考えられる怪獸をあらわすこと、外區や半圓方形帶の表現などに獨特の圖像紋様をもつ。それはグラハム・コレクシヨン藏の同向式神獸鏡 [Dewar 1994: no. 55] に酷似し、その集釋七四二Aとも共通する語句が多い。方格の銘文は陽部の「剛」・「張」・「彊」・「皇」・「長」と東部の「容」・「從」が叶韻する。

第一句の「九子」は三段式神仙鏡の上段に表された九子像に起源し（華西〇一・〇二）、やがて吉祥の意をふくむ作鏡者名に轉じた（華西〇三・〇五）。本鏡の「九子」は作鏡者である。

第二句を圖録が「幽凍三商」とするのは誤り。「金剛」は華西系

に特有の語句で、華西〇八の注を参照。

第三・第四句を圖録が「四守家靈、大容□張」と讀むのは誤り。「四氣象元、六合設張」は集釋七三一・七三二などに例が多い。

第五句を圖録は四字とも未讀だが、寫真から判斷して上三字は「造作刑」で、第四字は「暮」か。三角縁一四に「刑暮周刻用青同」という類例があり、その注を参照。

第七句に對應する伯牙の圖像が最上段にある。

第一〇句を圖録では「俸侍三皇」と讀む。集釋七四二Aに「奉□三皇」とあり、その第二字は未讀であつたが、圖録釋の「俸侍」は「奉持」の假借であろう。「三皇」は集釋七三四や建安十年（二〇五）五月六日の重列式神獸鏡などに「五帝三皇」とあるが、建安年間の重列式神獸鏡では「五帝天皇」とするのがふつうで、「三皇」はめずらしい。

第一一句の「承」は「奉じる」。『説文』十二上に「奉也」とある。本句は五行を奉ずれば、福祿が集まることをいう。「五行」に直接ふれた鏡銘に集釋四〇三の「聖人之作鏡兮、取氣於五行」、集釋四〇四の「取氣五行有剛紀」、集釋四〇五の「五行德令鏡之精」などがある。

# ●七四三B

惟此明鏡、  
幽涑三商。  
本出吳郡、  
張氏元公。  
百涑、  
制作虛无、

惟れ此の明鏡は、  
三商を幽鍊せり。  
本と吳郡より出でし、  
張氏の元公は、  
百たび鍊り、  
虛無を制作するに、

自異於衆。 自づから衆と異なる。

造爲明鏡、 明鏡を造爲するに、

日月合萌。 日月と明を合はさん。

四時永別、 四時を永へに別ち、

□□命長。 □□の命は長からん。

（注）

杭州の孔震氏が所藏する環狀乳神獸鏡の外區銘（岡村二〇一二）。二〇一一年に岡村・森下・向井が調査した（圖3）。徑一〇・二センチ、重さ一五六グラム。内區は四神四獸の構成だが、獸は肩までの上半身しかなく、環狀乳は四個だけである。銘文は末句の「長」字の末端を渦狀に巻いて長く垂下させ、發語の「惟」から時計回りに展開する。第五句が「百涑」の二字で途切れているほかは、整った四字句であり、陽部の「商」・「萌」・「長」と東部の「公」と冬部



圖3 集釋 743B 孔震氏藏「張氏元公」環狀乳神獸鏡

の「衆」が叶韻する。陽部と東部と冬部の叶韻は集釋五四二や黃武元年（二二二）對置式神獸鏡などに例がある。

第一句から第四句までは集釋七四四の「惟此明鏡、千出吳郡、張氏元公」に第二句の「幽凍三商」を加え、「千出」を「本出」に改めたもの。本銘により集釋七四四の「千出」は報告釋の「千出」ではなく、集釋のとおり「遷出」の假借であることが判明した。集釋七四三Aに「吳郡胡陽張氏元公」とあることから、本銘によつて作者の「張氏元公」はもともと「吳郡胡陽」に出自し、そこから別の場所に移つて本鏡を制作したことがわかる。

第五句の「百凍」は黃武元年鏡に「制作百凍明鏡、清□且富」とあるほか、吳の紀年鏡銘には「百凍正銅」・「百凍清銅」・「百凍精銅」という例が多い。つぎの集釋七四三Cのように「百凍千辟」と書くべきところを、第二句に「幽凍三商」という類句を記したことに氣づき、「百凍」の二字で銘刻を中斷したのであろう。このため、第六句以下は集釋七四三Aをそのまま踏襲したのである。

第九句を集釋七四三Aでは「四時永則」としたが、二〇一年に紹興市文物管理局で現物を觀察し、本銘と同じ「四時永別」の誤りであることを確かめた。

第一〇句の上二字は鏤のため讀めない。

半圓方形帶の方格には「吾作明鏡、幽凍三商。長保二親。」という一二字の銘文がある。

### ●七四三C

惟此明鏡、  
煥竝照、  
本出吳郡、

惟れ此の明鏡は、  
煥やき竝びに照（明）なり。  
本と吳郡に出でし、

張氏元公。  
百凍千辟、  
分別文章。  
左龍右虎、  
招福除英。  
對距相鄉、  
朱鳥鳳皇。  
男則侯、  
女即侍王。  
天神集會、  
祐父宜兄。  
久服長飮、  
位三公。

張氏元公は、  
百たび鍊り千たび辟<sup>のそ</sup>き、  
文章を分別せり。  
左龍と右虎は、  
福を招き殃を除く。  
距に對し相ひ嚮かふは、  
朱鳥と鳳凰なり。  
男は則ち侯（に封ぜられ）、  
女は即ち王に侍さん。  
天神集會し、  
父を祐<sup>たす</sup>け兄に宜し。  
久しく服し長く飮<sup>をたくし</sup>にすれば、  
位三公（に至らん）。

（注）

前鏡と同じ「張氏元公」の作であり、臺北・莊靜芬氏の所藏する同向式神獸鏡の外區銘（岡村二〇一二）。二〇一年に岡村と森下が調査した（圖4）。徑一〇・四センチ、重さ一五五グラム。内區の主紋は「距（巨）」で三段に區畫し、上段に伯牙と鍾子期、中段の左右に東王公・西王母と二獸、下段に黃帝と二獸を配置する。四獸のうち東王公の上にいる獸が「距」を口に銜えている。外區の銘文は時計盤で十二時の位置に「・」記號があり、そこから時計回りに展開する。整った四字句で、東部の「公」・「公」と陽部の「章」・「英」・「皇」・「王」・「兄」が叶韻する。

第一句から第四句までは、前の集釋七四三Bを踏襲しつつ、第二句を「煥竝照（明）」に改めている。つぎの集釋七四三Dからみて、第二句末に「明」字を脱している。その第三字は「昭」の下を





圖4 集釋 743C 莊靜芬氏藏「張氏元公」同向式神獸鏡

「火」につくる。

第五句の「辟」は「のぞく」。この句は原料の鑛石をくりかえし精錬して不純物を除去することをいう。類句に集釋四二九の「涑治錫銅去其辛」がある。

第六句の「文章」は、紋様の美しさ。『史記』禮書に「刻鏤文章、所以養目也。」とあり、集釋四〇一に「涑治銅華清而明。以之爲鏡宜文章」という類句がある。

第七句の「左龍右席」は内區にあらわされた獸を指す。

第八句の「英」は同じ「央」を聲符とする「殃」の假借で、「わざわざ」の意味。

第九句第二字の「距」は、つぎの集釋七四三Dには「巨」とある。

「距」は「巨」の繁字で、「鉅」の假借。『說文』十四上に「鉅、大剛也。」とあり、内區圖像の二獸が口に銜えている天空の堅い柱に

ほかならない。畫紋帶神獸鏡の集釋七三二には「舉方奉員、通距虛空」、三角緣神獸鏡の集釋・三角緣〇八には「身有文章口銜巨」とある。三角緣神獸鏡の「巨」の解釋をめぐって、さまざまな説が提起されてきたが、畫紋帶神獸鏡の銘文に「距（巨）」とあることは氣づかれなかった。「郷」は「嚮」の省字または假借で、「むかう」意。

第一〇句の「鳳皇」は「鳳凰」。第九句を承けて「朱鳥」と「鳳凰」が「距」を挟んで向かいあうことをいう。内區にあらわされた四獸は、この「朱鳥鳳皇」と第七句の「左龍右席」であろうが、個々の圖像を同定することはむずかしい。

第一一句はつぎの集釋七四三Dからみて第三字の「封」が脱落している。類句に集釋四三五の「男爲侯、女嫁王」、集釋六〇四の「男封侯女王婦」、集釋六一二の「男封大君女王婦」などがある。

第一四句の「祐」は「たすける」。集釋二一八・四一〇・五三九に「宜弟兄」、集釋四四〇に「常葆父母利弟兄」とあるが、父と兄を並べていうのは「蓋」環狀乳神獸鏡の方格銘にある「利父宜兄」（集釋七四六注）のみである。

第一五句の「飫」は『爾雅』釋言に「飫、私也。」とあり、わたくしにもつこと。

半圓方形帶の方格には「吾作明鏡、幽涑三商。其師命長。」という一二字の銘文がある。

#### ●七四三D

惟此明鏡、  
煥竝照明。  
本出吳郡、

惟れ此の明鏡は、  
煥やき竝びに照明なり。  
本と吳郡に出でし、

張氏元公。

百凍千辟、

分別文、

對巨相郷、

朱鳥鳳皇。

天神集會、

祐父宜兄。

男則封侯、

女即侍王。

久服長飫、

位至三公。

曾年益壽、

其命長。

張氏元公は、

百たび鍊り千たび辟<sup>のそ</sup>き、

文(章)を分別せり。

巨に對し相ひ嚮かふは、

朱鳥と鳳凰なり。

天神集會し、

父を祐<sup>たす</sup>け兄に宜し。

男は則ち侯に封ぜられ、

女は即ち王に侍さん。

久しく服し長く飫<sup>わたくし</sup>にすれば、

位三公に至らん。

年を増し、壽を益さん。

其の命は長からん。

(注)

上海漢雅堂の所藏する同向式神獸鏡の外區銘〔張東二〇一一・四四頁／岡村二〇一二〕。二〇一一年に岡村・森下・向井が調査した。徑一二・八センチ、重さ三二四グラム。四獸の肩に環狀乳をのこし、いずれも口に「巨(距)」を銜えている。外區の銘文は時計盤で五時の位置に浮彫の獸面があり、そこから時計回りに展開する。前の集釋七四三Cを踏襲した銘文だが、「左龍右虎、招福除英」のかわりに「曾年益壽、其命長」の二句を末尾に加えている。陽部の「明」・「英」・「皇」・「王」・「兄」・「長」と東部の「公」・「公」とが叶韻する。釋文はおおむね張東〔二〇一一・四四頁〕にしたがう。第五句の第三字を張東は「平」とするが、第一畫を渦狀にした「千」字で、集釋七四三Cと字形が異なっている。第六・第七句を張東は「分別文對、見相卿」と釋すが、前の集釋

七四三Cをみると、韻字である第六句末の「章」字が脱落し、「對」は第七句の第一字で、「見」は「巨」の誤釋である。

第一三句の末字を張東は「伺」とするが、「飫」の誤釋。

半圓方形帶の方格は一二枚あり、「田」字形に區畫して四字句を配している。銘文は時計盤で十時過ぎの位置にある方格から時計回りに展開し、陽部の「商」・「彊」・「長」・「羊」と東部の「谷」・「從」・「凶」とが叶韻する。第七句までは集釋七三五に類似する。

吾作明鏡、

幽凍三商。

配像萬彊。

白牙舉樂、

衆神見容。

百精竝存、

福祿自從。

左龍右虎、

主誅鬼凶。

永保所昌、

其師命長。

大吉百羊。

吾れ明鏡を作るに、

三商を幽鍊せり。

像を萬彊に配せり。

伯牙樂を舉ぐれば、

衆神容を現はす。

百精竝存し、

福祿自づと從<sup>あづ</sup>まらん。

左龍と右虎は、

鬼凶を誅するを主<sup>つかさ</sup>どる。

永へに昌<sup>とこし</sup>なるを保ち、

其の師の命は長からん。

大吉にして百<sup>もろ</sup>もの祥あらん。

# ●七四三E

惟此明鏡、

煥竝照明。

□禹所作、

本出雒陽。

惟れ此の明鏡は、

煥<sup>かが</sup>やき竝びに照明なり。

趙禹の作りし所なり、

本と雒陽に出づ。

百煉千辟、百たび鍊り千たび辟<sup>のそ</sup>き、  
分別文章。文章を分別せり。

左龍右虎、左龍と右虎は、

招福除英。福を招き殃を除く。

對距□鄉、距に對し相ひ嚮かふは、

朱鳥鳳皇。

朱鳥と鳳凰なり。

天神集會、

天神集會し、

祐父宜兄。

父を祐<sup>なす</sup>け兄に宜し。

男則封侯、

男は則ち侯に封ぜられ、

女即侍王。

女は即ち王に侍さん。

大吉祥。

大いに吉祥ならん。

(注)

孔震氏の所藏する八鳳鏡にみる〔岡村二〇一二〕。二〇一一年に岡村・森下・向井が調査した。鏡は細かく割れて鈕を缺失しているが、徑一三・〇センチ、現狀の重さ二〇〇グラム。鈕座に「長宜子孫」銘と「位至三公」銘を配し、内區に雙鳳紋と連弧紋、外區に銘帶と素紋帶がある。集釋七四三A～Eの「張氏元公」鏡はすべて浮彫表現の神獸鏡であるのにたいして、本鏡は平面的な切り繪ふうの八鳳鏡である。しかし、銘文は集釋七四三C・Dに酷似し、整った四字句で、「明」・「陽」・「章」・「英」・「皇」・「兄」・「王」・「祥」が陽部で隔句押韻する。

第一・第二句は集釋七四三Dに同じ。第二句の「照」字は「昭」の下を「火」につくことも「張氏元公」鏡と共通する。

第三・第四句は集釋七四三B～Dの「本出吳郡、張氏元公」にならい、作鏡者の「□禹」が「雒陽」に出自することをいう。「本出雒陽」を第四句にしたのは、偶數句で韻をふむための倒置である。

黒川古文化研究所に本鏡と紋様構成の類似した八鳳鏡があり、そこには「趙□可造」とあることから、未讀の一字は「趙」で、作鏡者の姓は「趙」で名は「禹」であろう。「雒陽」は後漢の都。鏡工の「趙禹」が南遷してきたのは、董卓によって雒陽が灰燼に歸した一九〇年の事件が契機になったのかもしれない〔岡村二〇一二〕。

第七句に「左龍右虎」とあるが、本鏡には鳳凰の圖像がなく、「張氏元公」鏡の銘文を轉用した虚辭である。

#### ●七四八A

雒家作鏡、

雒家鏡を作るに、

好絜少雙。

好潔にして雙ぶもの少なし。

更造衆倚、

更に衆奇を造り、

悉圖萬疆。

悉く萬疆を綸<sup>をさ</sup>む。

元氣之像、

元氣の像は、

正在中央。

正に中央に在り。

賢聖神仙、

賢聖なる神仙は、

燕處雲明。

雲明に燕處す。

天禽來降、

天禽來降し、

威伏四方。

四方を威伏す。

邊則大一、

邊は太一に則り、

還□而行。

還□して行く。

乘雲悅忽、

雲に乗り悦忽として、

參駕神龍。

參駕するに神龍をもつてす。

選從羣仁、

群人を選び從ふ、

上古三皇。

上古の三皇あり。

撫呼除道、

拓<sup>ひら</sup>きて道を除い、

癡尤辟撓。  
百精竝存、  
何耶敢當。  
能常服之、  
爲者命長。  
富貴安樂、  
喜訢未央。  
永得所驩、  
仕宦公卿。  
子孫蕃昌。

蚩尤撓を辟く。  
百精 竝び存すれば、  
何の邪か敢へて當たらん。  
能く常へに之を服せば、  
爲る者の命は長からん。  
富貴安樂にして、  
喜欣 未だ央まず。  
永へに歡ぶ所を得、  
仕宦しては公卿とならん。  
子孫蕃昌ならん。

(注)

鄭州の王趁意氏が所藏する同向式神獸鏡の外區銘(中原一三二／今照一二七)。二〇一二年に岡村・森下・向井が調査した(圖5)。内區の圖像は、向かって鈕の左に三山冠の東王公、右に勝を戴く西王母、上に琴を弾く伯牙、下に蹲踞形の獸をあらわす。これらを四乳で區畫し、乳の周圍にはそれぞれ獸がからみつく。銘文は整った四字句で、起句の前に「・」記號があり、陽部の「疆」・「央」・「明」・「方」・「行」・「皇」・「當」・「長」・「央」・「昌」・「卿」と東部の「雙」・「龍」、宵部の「撓」が叶韻する。

第一句は「雒家」が鏡の制作者であることを述べる。「某家作」の銘文はめずらしく、それは作鏡者ではなく、發注者であつた可能性もある。「雒家作」のほか、永平七年(六四)正月鏡の「公孫家作竟」(紀年鏡圖說・漢四)、後述する中國國家博物館藏の「馮家作」四獸鏡(楊桂榮一九九三・圖一二八)や紹興越國文化博物館藏の「陳家作」四獸鏡がある。

第二句の「好潔」は、うつくしくきよらか。千葉縣木更津市の高



圖 5 集釋 748A 王趁意氏藏「雒家」同向式神獸鏡

部三〇號墳から出土した畫像鏡に「好潔無疆」という銘文がある。「少雙」は『漢書』吾丘壽王傳に「天下少雙、海內寡二」とあるように、比類ないすぐれた鏡であることを述べたもの。

第三句の「倚」は「奇」の繁字または假借。集釋五二〇に「成平倚竟兮」、集釋五二七に「造此倚物」とある。「衆倚」とは、この鏡にめずらしい圖像が多く表現されていることをいう。

第四句の「圖」は「綸」の假借であらう。「綸」は、おさめる、すべる。

第五・第六句は内區の圖像について表現したもの。「元氣」は『說文』十三下に「地、元氣初分、輕清陽爲天、重濁陰爲地、萬物所陳列也。」というように、萬物の根源と考えられていた。林巳奈夫(一九九九・八二〜八三頁)によれば、「元氣」とは陰陽の兩性質を内包する存在であるから、本鏡では陽と陰の性質をもつ東王

公・西王母を含む内區の圖像が「元氣之像」にあたり、それが鏡の表現する世界の中央に存在することを述べたのであろう。

第七・第八句は内區にあらわされた東王公・西王母の圖像を指す。集釋七二八に「賢聖神仙坐東西」という類句がある。「燕處」は、「くつろぎ居る」こと。『老子』第二十六章に「燕處超然」という。

第九・第一〇句の「天禽」を梁上椿『巖窟藏鏡』二下九は天にいる鳥とし、林巳奈夫(一九七八)は天にいる四足の獣と解釋する。集釋七三一の注を参照。「威伏」は「威服」に通じ、威をもつてしたがわせること。『漢書』燕刺王旦傳に「昔秦據南面之位、制一世之命、威服四夷」とある。本鏡銘では「天禽來降し、四方を威伏す」というから、「天禽」は四つの乳にからみつく獸を指す。

第一一句の「邊」とは鏡外區の畫紋帶の圖像のこと。「大一」は「太一」で天帝を指し、畫紋帶にあらわされた雲車に乗る神がこれにあたる。『史記』天官書に「中宮天極星、其一明者、太一常居也。」といい、その『正義』に「泰一、天帝之別名也」という。集釋七三三に同じ句があり、前釋では「得則太一」としたが、本銘により「邊則大一」に正すべきである。

第一二句は雲車が畫紋帶をめぐる様子を述べたもの。「還□而行」を中原は「還緩而行」と釋すが、二字目は「緩」とは異なる字形である。集釋七二八の「遇即還行」に近い。

第一三句の「乘雲悅忽」を中原が「乘雲悅乎」と釋するのは誤り。「悅忽」は「恍惚」の意味で、ほんやりとして形がないような状態。『淮南子』原道訓に「忽兮恍兮、不可爲象兮。恍兮忽兮、用不屈兮」という。

第一四句は畫紋帶にあらわされた龍が牽引する雲車を指す。『楚辭』九歌・河伯に「乘水車兮荷蓋、駕兩龍兮騖螭」という。また

『淮南子』覽冥訓に「乘雷車、服駕應龍、騖青虬」とあり、その高誘注は「駕應德之龍、在中爲服、在旁爲騖。有角爲龍、無角爲虬。」と解説する。すなわち「參」は「騖」で、そえ馬のこと。集釋七二二に「參駕四馬」という類似句がある。

第一五・第一六句は、上古の三皇が多くの人びとを選んで従えていることをいう。「群仁」の「仁」は「人」の假借。「選從」は選び従える。『漢書』五行志に「成帝鴻嘉・永始之間、好爲微行出游、選從期門郎有材力者、及私奴客、多至十餘、少五六人、皆白衣袒幘、帶持刀劍」といい、『漢書』江充傳の「臣願選從趙國勇敢之士、從軍擊匈奴、極盡死力、以贖丹罪。」に顏師古は「選取勇敢之士、以自隨。」と注する。類似句に集釋七三四の「導從羣神、五帝三皇」があり、前釋では「導き従ふ羣神に、五帝三皇あり」と訓讀したが、「羣神を導き従ふ、五帝三皇あり」と讀むのが妥當であろう。畫紋帶の圖像のうち、雲車に乗る「太一」の後方の人物が、この「三皇」にあたる可能性がある。

第一七句の「撫」は「拓」に同じで、ひらく。『說文』十二上に「拓、拾也。陳宋語、从手石聲。撫、拓或从庶。」とあり、『方言』一にも「撫、取也。陳宋之間曰撫。」という。ただし、開拓の「拓」は「斥」や「垢」に當てた假借的用法である(藤堂明保一九六五・No.八二)。陳と宋はいまの河南省東部で、制作者の出自がうかがえる。「除道」は、道をはらい清める。『國語』周語中に「故夏令曰、九月除道、十月成梁。」とあり、韋昭注に「夏令、夏后氏之令、周所因也。除道所以便行旅、成梁所以便民、使不涉也。」という。本鏡では、雲車の行路をひらいて清めることをいう。集釋四五二に「左龍右虎辟除道」とあり、集釋五一六に「倉龍白虎主除道兮」とある。



第一八句を中原は「癡尤辟邪」とするが、第四字は「邪」と字形が異なり、韻も踏みはずしている。後述の孔震氏藏盤龍鏡を参照すると「癡尤辟撓」であろう。『釋名』釋姿容に「蚩、癡也。」とあり、「癡尤」は「蚩尤」を指す。「撓」は擾亂のこと。すなわち、「蚩尤」によって擾亂が退けられることを述べた句である。「蚩尤」は黃帝に討伐された傳説上の人物で、『史記』五帝本紀は「蚩尤作亂、不用帝命。於是黃帝乃徵師諸侯、與蚩尤戰於涿鹿之野、遂禽殺蚩尤。」と記す。しかし、漢代には軍神としてまつられることが多い。漢の高祖が沛に兵を挙げたとき、『漢書』高帝紀上に「祠黃帝、祭蚩尤於沛廷、而響鼓旗。」とあり、その注に應劭は「蚩尤亦古天子、好五兵、故祠祭之、求福祥也。」という。また、『後漢書』馬援傳には、馬援の甥の嚴に「蚩尤」を武器庫でまつらせている〔水野清一一九五四〕。その「蚩尤」の形象については諸説がある。山東省沂南畫像石などにみる多種の武器を執る獸形の神を「蚩尤」にあてる説が古くからあるが〔劉銘恕一九五五など〕、林巳奈夫〔一九七四〕はこれを「蚩尤が戦争の神であることをこの種の像が武器を澤山持つことに結びつけただけの思ひつきの説」にすぎないと否定する。

緯書のひとつとされる『龍魚河圖』（『藝文類聚』卷十一、『太平御覽』卷七十九所引）に「獸身人語、銅頭鐵額、食沙石子」とあり、『歸藏』啓筮（『初學記』卷九所引）は「八肱八趾疏首」とし、梁の任昉の著作と伝えられる『述異記』卷上には「俗云、人身牛蹄、四目六手」あるいは「秦漢間説、蚩尤氏耳鬚劍戟、頭有角」という。中原は内區の神獸のうち鈕の下に配された蹲踞形の獸形神を「蚩尤」に比定するが、本銘では道をひらき清める役割を果たしているのであるから、その圖像は畫紋帶に求められるべきであり、雲車前方の熊形の獸がそれにあたると考えられる。張衡「西京賦」（『文

選』卷二）には「天子乃駕雕軫、六駿駁、……華蓋承辰、天畢前驅、千乘雷動、萬騎龍趨。……于是蚩尤秉鉞、奮鬣被般、禁御不若、以知神奸。螭魅魍魎、莫能逢旃。」とあり、天子が六馬の車に乗って天象のあいだを出遊するとき、「蚩尤」が先導して魑魅魍魎を退けるといふ。

第一九句の「百精竝存」は、集釋七四二・七四三に例がある。

第二〇句の「耶」は「邪」に通じ、よこしまなもの。「敢當」は、あえて敵對する、また無敵であることをいう。この鏡のもつ力がきわめて強く、あらゆる邪惡をはらうことを宣傳する文句であろう。

第二一・第二二句はめずらしいが、中國國家博物館藏の「馮家作」四獸鏡に「能常服之、爲者命長」という類似句がある〔楊桂榮一九九三・圖一二八〕。

第三三句の「富貴安樂」は北朝鮮<sup>①</sup>ヨンヤン市出土と伝えられる四獸鏡（樂浪郡・圖二〇〇）の外區銘帶に例がある。

第二四句の「喜訴」を中原は「喜訴」と釋すが、「訴」は「欣」の古字で、よろこぶ。「訴」とは別字。

第二五句の「驪」は「歡」の假借で、よろこぶ。桃陰・二四の同向式神獸鏡銘に「願常服之、永得所驪」とある。

第二六句の「仕宦」は「仕官」と同義で、出仕して役人となること。『史記』平準書に「然市井之子孫、亦不得仕宦爲吏。」とある。

## ●七四八 B

雒家作鏡、

雒家鏡を作るに、

變易俗常。

俗常を變易す。

更造衆倚、

更に衆奇を造り、

悉圖萬疆。

悉く萬疆を綸む。

中建四禽、  
 丞福除殃。  
 邊則大一、  
 參駕神龍。  
 撫呼除道、  
 癡尤辟撓。  
 窮倚食鬼、  
 以除咎凶。  
 百精竝存、  
 何耶敢當。  
 能長服之、  
 爲者富昌。  
 壽命不頃、  
 豫天地同。

中に四禽を建て、  
 福を承け殃を除く。  
 邊は太一に則り、  
 參駕するに神龍をもつてす。  
 拓きて道を除い、  
 蚩尤撓を辟く。  
 窮奇鬼を食らい、  
 以て咎凶を除く。  
 百精竝び存すれば、  
 何の邪か敢へて當たらん。  
 能く長く之れを服せば、  
 爲る者は富み昌えん。  
 壽命傾かず、  
 天地と同じからん。

(注)

杭州の孔震氏が所藏する盤龍鏡の外區銘（今照一二七）。二〇一年に岡村・森下・向井が杭州の孔震氏宅で調査した（圖6）。銘文は整った四字句で、起句の前に「・」記號があり、陽部の「常」・「疆」・「央」・「當」・「昌」と東部の「龍」・「凶」・「同」と宵部の「撓」とが叶韻する。

第二句は、世間一般のものとは異なるすぐれた鏡であることを述べたもの。「變易」は變わる、改變すること。『管子』四稱に「不修先故、變易國常」とある。

第五句は内區にあらわされた、相向かう龍形獸二頭と蹲踞形の獸二頭を指す。

第六句の「丞」は「承」の假借。王充『論衡』骨相に「州郡丞旨

召請、擢用舉在本朝」という。「央」は「殃」の省字で「殃咎」のこと。集釋六〇五の注を參照。

第一〇句を今照は「癡尤辟邪」と釋したが、「癡尤辟撓」が正しい。第一一句の「倚」は「奇」の繁字または假借。「窮奇」は天神の名。集釋六〇二の注を參照。また第二二句を今照は「以怯各凶」と釋したが、「以除咎凶」が正しい。すなわち、「窮奇」が悪鬼を食らい、それによつて災いが除かれることを述べたものである。

第一五句は上記七八Aの第二一句に類似するが、「常」を「長」とする。

第一六句の「富昌」は漢鏡に頻出する語であるが、「爲者」と作鏡者についていう例はめずらしい。

第一七・第一八句は、長壽を願つたもの。「頃」は「傾」の假借または省字。これに類似した文句は前漢鏡に多く、集釋一〇四の



圖6 集釋748B 孔震氏藏「雒家」盤龍鏡

「與天地相翼」、集釋二〇八の「與天相壽、與地相長」などがある。

●七四八C

雒家作鏡、  
海内寡雙。  
更造衆倚、  
天禽見容。  
邊則大一、  
乘雲駕龍。  
選從群神、  
五帝三皇。  
萬精竝存、  
辟除咎凶。  
願常服之、  
爲者壽長。

雒家鏡を作るに、  
海内に雙ぶもの寡なし。  
更に衆奇を造り、  
天禽容を現はす。  
邊は太一に則り、  
雲に乗り龍に駕す。  
群神を選び従ふ、  
五帝三皇あり。  
萬精竝び存し、  
咎凶を辟除す。  
願はくは常へに之れを服し、  
爲る者の壽は長からん。

(注)

紹興越國文化博物館に陳列する盤龍鏡の外區銘。二〇一一年、岡村・森下・向井が展示ケース越しに觀察した。整った四字句で、起句の前に「・」記號を配し、東部の「雙」・「容」・「龍」・「凶」と陽部の「皇」・「長」が叶韻する。

第二句の「海内寡雙」は天下に類のないすぐれた鏡であることを述べたもの。

第四句の「見容」は、後漢鏡銘では「衆神見容」が常套句で、「天禽」すなわち天にいる禽獸が姿をあらわすことを述べている。

第六句の「乘雲駕龍」は集釋七三四に例がある。

第七・第八句は、「三皇」と「五帝」が神がみを選び従えている

ことをいうもの。

第九句の「萬精」はめずらしい。「百精」と同じく多くの神靈を指す。

第一一句は「能」を「願」とする點が、上記七四八Aと異なる。

第一二句は作鏡者の長壽を願う句で、「師命長」や「其師命長」と同じ意味。

●七四八D

雒家作鏡、  
俗莫與雙。  
三禽來降、  
榮光見容。  
邊像大一、  
乘雲駕龍。  
選從萬精、  
誅討鬼凶。  
願常服之、  
爲者壽長。

雒家鏡を作るに、  
俗に與に雙ぶもの莫し。  
三禽來降し、  
榮光容を現はす。  
邊は太一を像どり、  
雲に乗り龍に駕す。  
萬精を選び従へ、  
鬼凶を誅討す。  
願はくは常へに之れを服し、  
爲る者の壽は長からん。

(注)

紹興越國文化博物館に所藏するもう一面の盤龍鏡の外區銘。前鏡と同じく二〇一一年に岡村・森下・向井が展示ケース越しに觀察した。起句の前に「・」記號があり、整った四字句で、東部の「雙」・「容」・「龍」・「凶」と陽部の「長」が叶韻する。

第二句の「俗」は世間、世のなか。世に比肩するものない鏡であることをいう。

第三句の「三禽」は、本鏡の内區にあらわされた龍形の獸二頭と

蹲踞形の獸を指す。

第四句の「榮光」は五色の瑞氣。緯書のひとつ『尚書中侯』（『初學記』卷六所引）に「榮光出河、休氣四塞」という。

第八句の「誅討鬼凶」は、集釋七三四に例がある。

\*

北京保利春季拍賣會のカatalog（『精金月華 光耀昭明——銅鏡專場』、二〇一二年・LOTAIN）に掲載されていた四獸鏡の外區銘。銘文の冒頭は前の「雒家」鏡の四面と類似するが、第五句以降はほかの後漢鏡にしばしばみる語句である。

雒家作鏡、

海内寡雙。

更造衆倚、

邊則太一。

雕刻無社、

配像萬疆。

天禽四首、

銜持維剛。

富貴安樂、

子孫蕃昌。

益壽延年、

其師命長。

雒家鏡を作るに、

海内に雙ぶもの寡なし。

更に衆奇を造り、

邊は太一に則る。

雕刻止まること無く、

像を萬疆に配せり。

天禽・四獸あり、

維剛を銜持す。

富貴安樂にして、

子孫蕃昌ならん。

壽を益し年を延ばし、

其の師の命は長からん。

\*

以上の「雒家」鏡のほか、それに類似する語句をもつ「馮家作」四獸鏡が中國國家博物館に所藏されている（『楊桂榮一九九三・圖一二八』）。小さな拓本しか報告されていないため、報告の釋文は檢證

できないが、「雒家」鏡の銘文を參考に句讀を改め、括弧内に正し  
いと思われる字を補って以下のように釋讀する。

馮家作鏡、好潔□美。更造□侍（倚）、取法上金。元氣之象、  
正處中央。天命（禽）來降、威伏□□、□□□□、□天而行。  
選從羣仁、乘駕文龍。白虎益孝、何服（耶）散（敢）當。能常  
服之、爲者命長。

また、紹興越國文化博物館には、つぎのような「陳家作」四獸鏡が  
陳列され、二〇一一年に岡村・森下・向井が陳列ケース越しに觀察  
した。銘文は第二句以下に未讀字が多いが、釋文はつぎのとおり。

陳家作鏡、象俗□雙。□□更造倚□□□□鍾子德棋□□塗、  
悉圖萬疆。天禽四首、銜持維剛。邊則太一、乘雲駕龍。選從羣  
神、五。

# ●七四八 E

吾作鏡、

世俗寡雙。

更造衆倚、

悉圖萬疆。

神禽四首、

銜持維剛。

辟邪距虛、

威伏遠方。

天祿白虎、

致福除凶。

願常服爲、

仕宦公卿。

吾れ鏡を作るに、

世俗に雙ぶもの寡なし。

更に衆奇を造り、

悉く萬疆を繪む。

神禽・四獸あり、

維剛を銜持す。

辟邪・距虛あり、

遠方を威伏す。

天祿・白虎あり、

福を致し凶を除く。

願はくは常へに服爲し、

仕宦しては公卿とならん。

富貴安樂、  
子孫蕃昌。  
其師命長。  
富貴安樂にして、  
子孫蕃昌ならん。  
其の師の命は長からん。

(注)

徐州の石兆祥氏が所藏する連弧紋鏡にみる。二〇一二年に岡村・森下・向井が調査した(圖7)。内區外周の銘文は起句の前に「…」と「…」を組みあわせた六點記號があり、時計回りに展開する。起句に一字の脱字があるほかは整った四字句で、陽部の「疆」・「剛」・「方」・「卿」・「昌」・「長」と東部の「雙」・「凶」が叶韻する。第二、第四句は「雒家」鏡の集釋七四八A、Dに多くみるが、第二句の「世俗」はめずらしい。

第五句の「神禽」は、本集釋補遺七二八Aに「幽淩三金、神禽萬彊」という例がある。「雒家」鏡の集釋七四八Aなど「天禽」と同じように天にいる禽獸を指したものである。

第七句の「辟邪」と「距虛」の組みあわせは、集釋五四二の「距虛辟邪除羣凶」や本集釋補遺七二八Aの「辟邪距虛、致福除凶」がある。「辟邪」は西域の、「距虛」は北方草原地帯の奇獸で、集釋四一四と集釋五四二の注を參照。

第八句の「威伏遠方」を集釋七四八Aや中國國家博物館藏の「馮家」四獸鏡(楊桂榮一九九三・圖一二八)は「威伏四方」につくる。第九句の「天祿」は「辟邪」としばしば對をなし、「師子」と組みあう集釋五四二のような例もあるが、本銘のように「白帟」と並列されるのはめずらしい。

第一〇句の第二字は難讀だが、集釋補遺七二八Aに「辟邪距虛、致福除凶」という類句があり、これも「福」であろう。

鈕座の周圍には「長宜子孫」の四字を反時計回りにめぐらす。



圖7 集釋748E 石兆祥氏藏「吾作」連弧紋鏡

●七四九

余作明鏡、  
幽淩三商。  
規矩無社、  
六合設張。  
八氣分陳、  
光照玄黃。  
天禽四首、  
揚威見容。  
神仙真人、  
子喬祝誦。  
千歲鄉靡、

余れ明鏡を作るに、  
三商を幽鍊せり。  
規矩止まること無く、  
六合に設け張る。  
八氣分かれ陳なり、  
玄黃を光照す。  
天禽・四獸あり、  
威を揚はし容を現はす。  
神仙・真人なる、  
子喬・祝融あり。  
千歲靡に響かい、



壁立相望。  
壁立して相ひ望む。  
雕文未見、  
文を雕るに未だ見ざるところ、  
敬奉賢良。  
賢良を敬し奉ぜん。  
願常服爲、  
願はくは常へに服爲し、  
仕宦公卿。  
仕宦しては公卿とならん。  
富貴安樂、  
富貴安樂にして、  
子孫蕃昌。  
子孫蕃昌ならん。  
曾年益壽、  
年を増し壽を益し、  
其師命長。  
其の師の命は長からん。

(注)

杭州の孔震氏が所藏する四獸鏡にみる。二〇一一年に岡村・森下・向井が調査した(圖8)。銘文は整った四字句で、起句の前に孔雀らしき鳥の紋様が配される。陽部の「商」・「張」・「黃」・「望」・「良」・「卿」・「昌」・「長」と東部の「容」・「誦」が叶韻する。

第一句の「余」は、作鏡者の第一人稱。四川省綿陽市何家山一號墓出土の三段式神仙鏡に「余造明鏡」(華西〇二)とあり、「吾」の代わりに「余」を用いるのは華西系に散見する。

第三句の「規矩無社」は、集釋七三一・七三二にみえる。

第四句の「六合」は、天地と四方のこと。「六合設長」は集釋七三一・七三二にみえる。

第五句の「八氣」は、天がつかさどる八つの氣。『河圖括地象』(『太平御覽』卷三十六所引)に「天有八氣、地有八風」といい、また『舊唐書』禮儀志四は「天一掌八氣・九精之政令、以佐天極」と天の神が「八氣」をつかさどることを記している。本鏡では雲氣のあらわされた八つの半圓形を「八氣」といったのかもしれない。

第六句の「光照」は、ひかり輝かせること。『國語』鄭語に「光

照四海」という。「玄黃」は天地を指す。『周易』坤に「夫玄黃者、天地之雜也。天玄而地黃」といい、『千字文』の冒頭に「天地玄黃」とある。

第八句の「揚威」は、威光をさかんにあらわす。『漢書』陳湯傳に「縣旌萬里之外、揚威昆山之西」という。

第九句の「真人」は道をさとり、仙人になりえた人を指す。『淮南子』本經訓に「莫死莫生、莫虛莫盈、是謂真人」といい、『楚辭』九思・守志に「隨真人兮翱翔、食元氣兮長存」とある。

第一〇句の「子喬」は王子喬、「祝誦」は祝融のこと。山東省武梁祠畫像石にあらわされた祝融の像は「祝誦氏、無所造爲、未有奢侈、刑罰未施」の榜題をもつ。祝融は顓頊の後裔とされ、帝嚳のとき火正の官であったことから(『史記』楚世家など)、のちに火・夏・南方の神として信仰された。本鏡では、八つの半圓形の間にそ



圖8 集釋749 孔震氏藏「余作」四獸鏡

れぞれ仙人や羽人などの像があらわされており、そのなかに王子喬と祝融が含まれている可能性がある。

第一一句の「郷」は「嚮」の假借で、むかう、おもむく。「靡」は「麗」に通じ、うつくしい。

第二二句の「壁立」は、壁のごとくそびえたつ。甘肅省成縣の西方にある建寧四年（二七二）の西狹頌摩崖に「兩山壁立、隆崇造雲」の句がある（永田一〇一）。

第一三句の「雕文」は彫刻された紋様のことで、ここでは鏡背紋様を指す。

第一五句の「願常服爲」は集釋七三五に例がある。

第一六句の「仕宦」は「仕官」と同義。上述した「雒家作」鏡の七四八Aに同じ句がある。

第一八句の「燔」は「蕃」の假借。

## ●七五〇

江氏作鏡四夷服。

多賀□□人□□。

胡虜殄滅天下復。

風雨時節五穀孰。

長保二親得天力。

傳告後世樂無亟。

男封侯女王婦。

家富貴從此始。

咏壽不減名聲在。

故刻明鏡表義理。

江氏鏡を作るに、四夷服す。多く□□を賀し、人民息ふ。

胡虜殄滅して、天下復す。

風雨は時節あり、五穀熟す。

長く二親を保ち、天祿を得。

後世に傳告し、楽しみ極まり無し。

男なれば侯に封ぜられ、女なれば王婦となる。

家の富貴は此れ從り始まらん。

壽を永くすること不減にして、名聲在らん。

故に明鏡に刻み、義理を表はす。

家在上虞。

家は上虞に在らん。

## （注）

徐州の李迪玲氏が所藏する環狀乳神獸鏡の外區銘。二〇一二年に岡村・森下・向井が調査した。直徑一〇・五センチ、重さ一四九グラム。銘文は起句の前に浮彫の鳥紋を配し、時計回りに展開する。第一―第六句は整った七字句で、職部の「服」・「力」・「亟」と覺部の「復」・「孰」が叶韻する。第七句で換韻し、「婦」・「始」・「在」・「理」が之部で押韻する。

第一―第六句は王莽代の集釋四五四にはじまる定型の七字句で、後漢代には吳派の盤龍鏡や畫像鏡に多く用いられた〔岡村秀典二〇一一〕。なかでも「成氏」畫像鏡の集釋七二二と近似し、第七句以降に異なる内容の銘文が接續する點も共通する。

第七句の「男封侯女王婦」は集釋六〇四に同一句があり、その注を参照。

第八句は、第七句をうけて、男女の出世により家が繁榮することを祝頌したもの。類句として集釋四三〇の「從今以往樂乃始」があるが、鏡銘としてはめずらしい。

第九句の「咏」は「永」の繁字または假借。長壽と名聲の獲得を述べた句である。

第十句の「義理」は正しいすじみちのこと。『史記』秦始皇本紀にみる之罘の刻石銘に「外教諸侯、光施文惠、明以義理」という。

第一一句の「上虞」は會稽郡の屬縣で、郡治の所在する山陰縣の東隣にある。地名の由來について『水經注』卷四十に引く『晉太康地記』には「舜避丹朱于此、故以名縣。……亦云、禹與諸侯會事訖、因相虞樂、故曰、上虞。二說不同、未詳孰是。」とあり、傳説の聖人にちなんだ由緒のある地名である。類句に「會稽山陰作師鮑唐」作

の黃武六年（二二七）十一月七日鏡の「家在武昌」があり、その解釋をふまえると、これは作鏡者の江氏が上虞に出自することを述べたものではなく、服鏡者にかかわる吉祥句であったのかもしれない。半圓方形帶の方格には時計回りに一字ずつ「吾作□□、幽凍三商、周刻無」の一字を入れる。

●七五一

正月午日作此竟、 正月（丙）午の日に此の鏡を作るに、上人守皆食太倉。 上の人獸は皆な太倉に食まん。

（注）

長沙市博物館に所藏する對置式神獸鏡の方格銘「長沙市博物館編二〇一〇・一一三」。圖像紋様は畫紋帶をもつ通有の對置式神獸鏡で、半圓方形帶の方格に一字ずつ銘文をいれる。

第一句は年號を省略するが、同じように「正月午日」と記した例として、上海博物館藏の永康元年（一六七）正月環狀乳四神四獸鏡がある。「午」は「五」の假借で、「正月五日」を記したものという解釋も成り立つが、廣漢派の紀年鏡では「正月丙午日」と記した銘文が多く、その「日」は火氣のもっとも盛んな日中を意味することから、ここでは「丙」字が脱落していると解釋しておく。「日」については章和二年（八八）五月丙午鏡の注を參照。

第二句は鏡銘としては異例であるが、後漢代の壁畫や畫像石の傍題に類句が多い。たとえば、山東省東阿縣の永興二年（一五四）墓の題記には文末に「此上人馬、皆食太倉」とあり、永田七二は畫像中の人馬がみな昇天して天の倉から食料を給されるようにと解釋している。また、佐伯有清（一九八七）が類句を集成しており、山東省を中心とする北中國に二世紀後半の例が多い。

●建安九年（二〇四）十二月七日 重列式神獸鏡

幽凍宮商。 宮と商とを幽鍊し、

周亥容象、 容象を彫刻して、

五帝天皇。 五帝と天皇とあり。

除凶。 凶を除く。

白牙單琴、 伯牙は琴を弾き、

黃帝除兇。 黃帝は兇を除く。

建安九年、 建安九年、

臘月七日辛巳、 臘月七日の辛巳は、

大吉羊。 大吉祥なり。

（注）

上海の漢雅堂が所藏する重列式神獸鏡の外區銘。二〇一一年に岡村・森下・向井が調査した（圖9）。外區の銘文は、時計盤で七時前の位置から時計回りに展開し、陽部の「商」・「皇」・「羊」と東部の「凶」・「兇」とが叶韻する。第四句の「除凶」は衍字。建安七年から建安十年にかけての重列式神獸鏡銘と同じように、紀年句を銘末に配置し、末字の「羊」の縦畫を長く下垂させる。

第一句の第一字は字形やや不明瞭だが、同式銘の體例からみて「幽凍宮商」であろう。ただし、同式銘は「吾作明竟」を起句とするのが通例であり、本鏡ではこれを省く。第一句から第三句までは建安元年（一九六）五月二十四日鏡の注を參照。

第四句の「除凶」は衍字。「周亥容象、五帝天皇」の後には「白牙單琴、黃帝除兇」が直接つづくのがふつうである。「凶」は「兇」に同じ。『集韻』平聲・鍾韻に「凶、『說文』、惡也。：通作兇。」とある。

第八句の「臘月」は「臘月」とも書き、十二月の別名。『集韻』入聲二十八・盍韻に「臘、力盍切。『說文』、冬至後三戌、祭百神。



圖9 建安九年十二月七日 重列式神獸鏡  
漢雅堂藏

或作臍。」とある。『史記』陳涉世家に「臘月、陳王之汝陰、還至下城父」とあり、『索隱』は宗懷『荆楚歲時記』を引いて「臘節在十二月、故因是謂之臘月也。」という。ちなみに、「臘」はもと祭の名で、漢代では冬至後の三度目の戌の日におこなわれたが（『說文』四下）、後に十二月八日に固定した（『荆楚歲時記』）。「臘（臍）」は鏡銘では初出だが、建安二十年（二一五）十二月八日の同向式神獸鏡は、その臘日をとくに選んだ可能性がある。「辛」はこれを「立木」に作る異體字。『二十史朔閏表』によれば、建安九年十二月は乙亥朔で、その七日は「辛巳」となり、銘文の干支は實曆を記す。「辛巳」は、陰陽五行的には、辛（金）鏡／陰×巳（火／午前十時純陽）を意味して、金火融合、陰陽調和をあらわす鏡の吉日。そこで、第八句を「大吉祥」の語で結んだ。

鈕の上下の長方形區畫には、上部に「當示□」、下部に「君宜□」

という銘文がある。これら兩句の三字目は鈕や神像の頭部によって切斷され、字形不明。なお、上部の第二字の「示」は建安元年から建安十年までの重列式神獸鏡の作鏡者として頻出する「示氏」の姓ではなく、「視」の省字か。であれば、これらは「當示竟、君宜官（當に鏡を視るべし、君は官に宜しからん）」のような辭句であったかもしれない。「示竟」の例として建興二年（二五三）九月一日鏡に「示竟富且貴（鏡を視るものは、富み且つ貴からん）」がある。

●元興元年（二六四）十二月二十六日 對置式神獸鏡

元興元年、

十二月廿六日、

作明竟、

五練清同、

五たび清銅を鍊りたれば、

子孫に宜しく、

子女百人。

（注）

徐州博物館の所藏する對置式神獸鏡（徐州博物館編二〇一一・二五六頁）。外區の銘文は「・」記號より反時計回りに展開し、文部の「孫」と眞部の「人」が叶韻する。圖録はこれを句讀なく「元興元年十二月廿六日作明竟（鏡）五□□吉□寶子子□百人」と釋すが、誤讀と未讀字が多い。

第一句の「元興」は、永安七年（二六四）七月、吳主孫休の薨去により、孫權の孫の孫皓が即位して改元した年號。圖録はこれを後漢の元興元年（一〇五）とするが、鏡式や銘文の内容からして本鏡は吳鏡である。

第二句の「二十六日」は吳の紀年鏡でしばしば用いられる作鏡日

である。

第四句を圖録は「五□□吉□」とするが、「五練清同」であろう。建興二年（二五三）九月一日鏡に「五練九章」、永安六年（二六三）五月二十五日鏡に「五練青同竟」という類句がある。

第六句の「子女」は「むすことむすめ」。『春秋穀梁傳』僖公三十三年傳に「亂人子女之教、無男女之別。」とある。類句に集釋五二七の「子孫充實、姉妹百人」がある。半圓方形帶の方格には銘文がない。

出典略號（日中文とも五十音順）

開明堂……西村俊範 一九九四 『古鏡コレクション開明堂英華』、村上開明堂

嚴窟……梁上椿 一九四〇～一九四二 『嚴窟藏鏡』

今照……浙江省博物館編 二〇一二 『古鏡今照——中國銅鏡研究會成員藏鏡精粹』、文物出版社

小校……劉體智 一九三五 『小校經閣金文拓本』

千鏡堂……陳鳳九 二〇〇七 『丹陽銅鏡青瓷博物館 千鏡堂』、文物出版社

中原……王趁意 二〇一一 『中原藏鏡聚英』、中州古籍出版社

永田……永田英正編 一九九四 『漢代石刻集成』京都大學人文科學研究所研究報告、同朋舎

參考文獻（日中文とも五十音順）

王綱懷 二〇一〇 『止水集 王綱懷銅鏡研究論集』、上海古籍出版社

岡村秀典 二〇一一 『後漢鏡銘の研究』『東方學報』京都第八六冊

岡村秀典 二〇一二 『後漢鏡における淮派と吳派』『東方學報』京都第八七冊

郭錫良 一九八六 『漢字古晉手冊』、北京大學出版社

笠野毅 一九九三 『中國古鏡銘假借字一覽表（稿）』『國立歷史民俗博物館研究報告』第五五集

河北省文物研究所・石家莊市文物研究所 二〇〇七 『河北石家莊蕭家營漢墓發掘報告』『河北省考古文集』三、科學出版社

佐伯有清 一九八七 『食大倉考——德興里高句麗壁畫古墳の墓誌に關連して——』『日本常民文化紀要』第一三輯

徐州博物館編 二〇一一 『古彭遺珍 徐州博物館館藏文物精選』、國家圖書館出版社

張東 二〇一一 『中國古代銅鏡』、中國旅游出版社

藤堂明保 一九六五 『漢字語源辭典』、學燈社

南京博物院・盱眙縣文廣新局 二〇一三 『江蘇盱眙大雲山江都王陵二號墓發掘簡報』『文物』第一期

林巳奈夫 一九七四 『漢代鬼神の世界』『東方學報』京都第四六冊

林巳奈夫 一九七八 『漢鏡の圖柄二、三について（續）』『東方學報』京都第五〇冊

林巳奈夫 一九九四 『中國古玉器總說』吉川弘文館

水野清一 一九五四 『漢の蚩尤伎について——武氏祠畫像の解』『創立廿五周年記念論文集』、京都大學人文科學研究所

森下章司 二〇一一 『漢末・三國西晉鏡の展開』『東方學報』京都第八六冊

楊桂榮 一九九三 『館藏銅鏡選輯（三）』『中國歷史博物館館刊』總第二〇期

羅振玉 一九二九 『鏡話』『遼居雜著』

劉銘恕 一九五五 『關於沂南漢畫象』『考古通訊』第六期

Dewar, Susan ed. 1994. Bronze Mirrors from Ancient China. Donald H. Graham Jr. Collection. Hong Kong